

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

テリー・ギリアムのドン・キホーテ

2018年/スペイン・ベルギー・フランス・イギリス・ポルトガル映画
配給：ショウゲート/133分

2020 (令和2) 年1月25日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

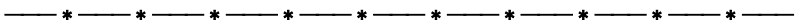
監督・脚本・声の出演：テリー・ギリアム
脚本：トニー・グリゾーニ
出演：アダム・ドライバー/ジョナサン・プライス/ステラン・スカルスガルド/オルガ・キュリレンコ/ジョアナ・リベイロ/オスカル・ハエナダ/ジェイソン・ワトキンス/セルジ・ロベス/ロッシ・デ・パルマ/ホヴィク・ケウチケリアン/ジョルディ・モリヤ

👁️👁️ みどころ

韓国のキム・キドク監督も“鬼才”だが、79歳を超えた今も“ハリウッドNo.1の異端児”と恐れられているテリー・ギリアム監督は今や世界一の鬼才！だって、構想30年、企画頓挫9回の本作を完成させたのだから。

ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)が「ネタバレ厳禁」宣言された予測不能の怒濤の展開なら、それは本作も同じ。しかし、本作のネタは最初から最後までバレバレだ。当初のジョニー・デップからアダム・ドライバーに変更された主役はドン・キホーテ役ではなく、一体ナニ？この脚本は一体ナニ？ギリアム流ドン・キホーテ・ファンタジーの展開は如何に？

本作には賛否両論が巻き起こるはず。つまり、「ワケわからん」というブーイングか、「こりゃ大傑作！」のどちらかだ。もし、あなたが前者なら、私はあなたに問いたい。あなたの夢は何か？と。ドン・キホーテの夢はホントの夢？それとも精神病患者の妄想？その見定めが、本作評価の分かれ目になるはずだ。



■□■構想30年！企画頓挫9回！この男こそ“鬼才”！■□■

“鬼才”という形容詞は、韓国のキム・キドク監督をはじめとして、さまざまな分野でのさまざまな成功者に対して使われるが、そこには、天才とは違う内容が含まれていることをしっかり味わう必要がある。しかして、世界広しといえども、今“鬼才”と呼ばれるに最もふさわしい映画監督は、1941年生まれのアメリカ人、テリー・ギリアムだろう。79歳を迎えた今もハリウッドNo.1の異端児と恐れられているそうだ。なぜなら、彼は「構

想30年、企画頓挫9回」という本作をついに完成させ、2019年3月の北米公開に続き、2020年1月4日には遂に日本でも公開したからだ。そんな彼はまさに鬼才！

本作が17年ぶりにクランクインしたのは2017年3月。そして、クランクアップしたのは6月4日だから、その間わずかに3か月だ。2000年9月にスペインのマドリード北部でクランクインしたにもかかわらず、自然災害、資金破綻、軍用戦闘機、腰痛で降板等々、さまざまな障害によって撮影中止となって以降、実に17年間も本作の撮影が再開できなかったことを考えると、再開後、わずか3か月で撮影が完了できたのは奇跡そのものだ。そして、2018年5月にカンヌ国際映画祭のクロージング作品としてプレミア上映された後は、フランスでの公開（5月）、スペインでの公開（6月）を実現したものの、再び権利問題に関する判決が出たため、ギリアム監督の映画化権は剥奪され、世界各国での上映が白紙になってしまったから、アレレ……。その後の詳しい経過を含め、「映画史上もっとも呪われた企画、そのヒストリー」については、パンフレットを参照されたい。

■□■キャスト一新だが冒頭は同じ！絵コンテの魅力を！■□■

ファッションの世界に“デザイン画”があるのと同じように、映画の世界には“絵コンテ”がある。これは、カメラで撮影し、スクリーン上に映し出すことになる映像のイメージを作画したものだが、一流監督になるための必要条件の一つがその才能だ。なぜなら、それは、映像演出の総責任者である監督の頭の中にあるイメージを、少しでも覗き見することができる貴重な資料なのだから。黒澤明監督の素晴らしい絵コンテの数々を、私は2018年6月28日に東京・京橋の国立映画アーカイブで開催された「没後20年 旅する黒澤明」展で堪能することができた。ちなみに今ドキの、世界文学全集から遠ざかっている日本の若者や子供たちは、ミゲル・デ・セルバンテス原作の小説『ドン・キホーテ』をどの程度知っているのだろうか？ひょっとして、「ドン・キホーテ」と聞いてもあの「激安の殿堂」のドン・キホーテや「びっくりドンキー」しか知らないのかも……？

それはともかく、「ドン・キホーテ」と聞けば、私を含め多くの人は誰でも風車を巨人と思い込んだ主人公が風車に向かって突進していく風景を思い出すはず。そんな一種の“滑稽本”をドストエフスキーやハイネ、フォークナーなど著名な作家たちが「最も偉大な小説」と口を揃えたのは意外だが、ギリアム監督がドン・キホーテを主人公にした映画を作るについて、きっと最初に描いた絵コンテはそれだったはずだ。

他方、撮影中止に至るまでの悪夢の一部始終を『ロスト・イン・ラ・マンチャ』というタイトルでドキュメンタリー風にまとめた作品が公開されたのは、2002年（『シネマ3』183頁）。同作でドン・キホーテ役を演じたのはジョニー・デップだが、同作は『蒲田行進曲』（82年）と同じように（？）、劇中劇として映画製作の過程をドキュメンタリー風にまとめた映画だから、ギリアム監督自身も出演している。そこではギリアム監督自身が描いた多くの絵コンテも見せてもらえたが、その躍動感は素晴らしいものだった。しかして、『ロ

スト・イン・ラ・マンチャ』の冒頭も、本作の冒頭も、その絵コンテそのものから始まるので、その名シークエンスをタップリ味わいたい。

■□■全く「似て非なる」ドン・キホーテ・ファンタジーに！■□■

本作の冒頭シーンがどこでどのように撮影されたのかは、1人1人がしっかりと確認してもらいたいが、それはギリアム監督の絵コンテ通り、お見事なもの。甲冑に身を固めた騎士姿で颯爽と馬上に跨るドン・キホーテも、その後方で小さなロバの上に座る従者のサンチョの姿も、見事にキマっている。

もっとも、キホーテが巨人だと思ひ込み、槍を構えて突き進んでいったのは巨大な風車だったから、キホーテはその風車に巻き込まれながら、身動きができない無様な姿に……。さあ、ミゲル・デ・セルバンテス原作の『ドン・キホーテ』は、その後どんな物語が展開していくのだけ？そう思っていると、意外や意外、本作はその後、全く似て非なるドン・キホーテ・ファンタジーになっていくから、アレレ……？

そんな冒頭のシークエンスは、今はCM監督をしているトビー（アダム・ドライバー）が、10年ほど前に卒業制作映画を撮るために、スペインのとある村で撮影したものらしい。彼は、現地で見つけた、いかにもキホーテ役にピッタリの雰囲気を持った靴職人の男ハビエル（ジョナサン・プライス）に出演を依頼。さらに、撮影隊が入り浸っていた酒場の主ラウル（ホヴィク・ケウチケリアン）の娘で、村一番の美少女アンジェリカ（ジョアナ・リベイロ）を一目で気に入ったトビーは、「君はスターになれる」と口説き落とし、彼女にも出演してもらっていた。

そんな風に現地の素人を大胆に起用できたのは彼が若かったからだ、それがかえって斬新な効果を生んだことによって、完成した映画は大絶賛され、荣誉ある賞に輝き、以降トビーはハリウッドを目指すことに。しかし、今やそれは完全に挫折し、今では金回りのよいCM監督という現実甘んじていた。しかして、今新作のCM撮影のために、自らの提案でスペインに来ているトビーは、現地のキャストは使い物にならず、撮影も一向に進まない現実の前に、「失敗だ、すべて中止に」と嘆いていた。そんなトビーに妻のジャッキ（オルガ・キュリレンコ）を連れて陣中見舞いに現れたボス（ステラン・スカルスガルド）が、怪しげな売り子（オスカル・ハエナダ）が差し出したDVDを「何かヒントになるかもしれない」と渡すと、何という偶然！それはトビーが学生時代に監督した映画『ドン・キホーテを殺した男』だった。さあ、トビーは、今それをどんな気持ちで鑑賞するの？

それはそれとして興味のある物語だが、『テリー・ギリアムのドン・キホーテ』と題された本作で、ドン・キホーテの物語とは全く似て非なる、そんなトビー監督のストーリーは今後どう展開していくの？

■□■十年ひと昔！この変化に驚愕！こんな脚本を誰が？■□■

「十年ひと昔」とはよく言ったもので、10年も経てば、人も社会も大きく変わるもの。平々凡々たる日常生活を送っていても、時としてそんなことを実感させられることがあるが、あの夢の村（ロス・スエニョス）が撮影現場のすぐ近くにあると知って、翌日バイクで出かけて行ったトビーは、そこで何とも驚愕する風景を目にすることに。彼もきつと「十年ひと昔」を実感したはずだ。

ここでは、ラウルの酒場もハビエルの靴屋も健在だったが、何かが変わってしまっていた。また、アンジェリカの消息を尋ねると、ラウルは苦々しい口調で、トビーのせいで女優になる夢を追ってマドリッドへ飛び出し、今ではすっかり墮落したと答え、その怒りをトビーにぶつけてきたからヤバイ。逃げるように店を出たトビーは、“キホーテは生きている”という看板を見つけ、案内役の老女に金を渡して入ってみると、掘っ建て小屋の中にドン・キホーテの衣装を着たハビエルが閉じ込められていたから、これまたビックリ。さらに、ハビエルはトビーをドン・キホーテの忠実な従者サンチョだと思い込み、「戻ってきたのか!」と歓喜して抱きついてきたから、トビーはどうするの?そして、「連れ出してほしい」とトビーに強引に頼むハビエルが、引き留めようとする老女と揉み合ううちに、ランプが倒れて小屋が燃え上がってしまったから、大変だ。しかし、待てよ。本作は、『テリー・ギリアムのドン・キホーテ』というタイトルのはずだが、こんな中盤になっても、まだまともなキホーテは登場してこないし、キホーテの冒険物語も登場しない。こりゃ一体ナニ?こんな脚本を一体誰が書いたの?本作の脚本は鬼オテリー・ギリアムとトニー・グリゾーニとの共同作業だが、こんな誰も想像できないドン・キホーテ・ファンタジーの展開にビックリ!

そう思っていると、何とか火災現場を逃げ出したと思っていたトビーのところに警官が現われ、トビーは連行されかけたからアレレ。これは、火事を通報した村人がバイクのナンバーを知らせていたためだが、そこでトビーの助けにやって来たのが、自分は高潔な騎士の精神を守り抜くドン・キホーテだと信じ込んでいるハビエル。愛馬“ロシナンテ”にまたがり、“サンチョ”を救出するため槍で警官を倒した上で、「二人で壮大な冒険へ旅立とう」とハビエルが高らかに宣言したから、さあ、いよいよここからドン・キホーテと従者サンチョの旅が始まることに。とは言っても、それは私たちが想像する騎士ドン・キホーテと従者サンチョのドルシニア姫を救うための冒険の旅とは異質なものになりそうだが・・・。

■□■ポン・ジュノ流vsギリアム流! 夢の追い方は? ■□■

第72回カンヌ国際映画祭で韓国映画初のパルムドール賞を受賞したポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)は、第92回アカデミー賞でも作品賞等計6部門にノミネートされる快進撃を続けている。同作は、監督自身がパンフレットで「ネタバレ厳禁!」宣言を出しているから、新聞紙評でも、導入部だけの紹介はあっても、中盤か

ら後半そしてクライマックスにかけての、“あつと驚く怒濤の展開”は全く書かれていない。事前にパンフレットを購入して「ストーリー」を読んでも、そこではほんのさわりだけしか書いていない。

それと同じように(？)、「構想30年、企画頓挫9回」を経てようやく完成した本作も、導入部の後は誰も想像できない、あつと驚くドン・キホーテ・ファンタジーの展開になっていくが、意外にも本作でギリアム監督は「ネタバレ厳禁！」宣言をしていない。したがって、公式ホームページでもパンフレットでも、「ストーリー」は最初から最後まで丁寧に紹介されているうえ、前述した「映画史上最も呪われた企画、そのヒストリー」や「INTRODUCTION」、「PRODUCTION NOTES」を読めば、本作撮影の舞台裏がしっかり理解できる。また、パンフレットには、萩尾瞳氏(映画・演劇評論家)の「ドン・キホーテは誰なのか？」と題するREVIEW、佐藤久理子氏(文化ジャーナリスト)の「2018年カンヌ国際映画祭 30年の時を経て、ついに迎えた特別な夜」、村山章氏(映画ライター)の「ファンタジーは現実を凌駕する」と題するコラムがあるので、それらを読めば、それぞれ「なるほど！」と納得させてくれる。

それはなぜ？それは、ポン・ジュノ監督はいじわるで、ギリアム監督は人が良いため？いやいや、絶対そうではないはずだ。私が思うに、ギリアム監督が本作について「ネタバレ厳禁！」宣言をしないのは、ギリアム監督が、30年間ずっと抱き続けてきた夢を実現させた本作のドン・キホーテを通じて、すべての観客に共有してもらいたかったためだ。日本人にとって、織田信長は徳川家康以上に魅力的な人物であり、坂本竜馬は吉田松陰や西郷隆盛、木戸孝允以上に魅力的な人物だが、それは彼らが徳川家康や吉田松陰、西郷隆盛、木戸孝允以上に大きな夢を持って時代の変革に突き進み、そして非業の最期を遂げたからだ。ギリアム監督の考えでは、ミゲル・セルバンテスの小説に登場する主人公ドン・キホーテは、きっと日本人が考える織田信長や坂本竜馬と同じような存在だったのだろう。

ドン・キホーテが追い求めた夢は、ドルシネア姫を救うため、忠実な従者サンチョを従えて冒険の旅に出ること。しかして、今トビーの協力によって(？)やっと10年間の幽閉生活から解放されたドン・キホーテことハビエルは、再び愛馬“ロシナンテ”にまたがり、「二人で壮大な冒険に旅立とう」と宣言したが、従者のサンチョはどこに？

■□■従者は大変！しかし、ご主人が亡くなれば？■□■

ミゲル・セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』では、スペインの片田舎の郷土アロンソ・キハーナがあんなキャラクターのドン・キホーテになったのは、騎士道物語が大好きで、それを読みふけたあげく、自分は騎士ドン・キホーテだと思い込んだため。そんな妄想(？)の結果、夢と現実をゴチャ混ぜにしながら冒険の旅に出た主人公は、『ロスト・イン・ラ・マンチャ』でも、本作でも、その冒頭に登場する、あの風車のシークエンスになったわけだ。そして、『ロスト・イン・ラ・マンチャ』はその後、映画撮影のドキュメン

ト風景を展開させていったが、本作は前述のとおりギリアム流のドン・キホーテが展開していくことになる。さあ、これからがいよいよ本番だ。

しかし、ドン・キホーテ役はジョナサン・プライスに決まっているものの、従者のサンチョ役はどうなるの？そう思っていると、従者サンチョはすでに夢の村（ロス・スエニョス村）で亡くなっていた。そのため、ハビエルはサンチョ役に当然のごとくトビーを指名したから、トビーはびっくり！自分はホンモノのドン・キホーテだと信じ込んでいる、ある意味で精神病患者のハビエルにいつまでも付き合うのは大変だ。私はそう思い、トビーに対する同情を禁じえなかったが、さてトビーはどうするの？

他方、本作では導入部でオルガ・キュリレンコ扮するボスの女房ジャッキが登場し、トビーと怪しげな仲を見せるので、それにも注目！また、「君はスターになれる」というトビーの言葉を信じ、女優になる夢を持ってマドリッドに飛び出したアンジェリカは「すっかり墮落してしまった」そうだが、今どうしているの？私のこの評論では、そこまで書く余裕がなくなったため省略するが、本作でギリアム監督はトビーの女絡みをめぐる物語でも興味深い展開をみせるので、それにも注目したい。

しかして、本筋の騎士ドン・キホーテことハビエルと従者サンチョことトビーの二人による“弥次喜多道中”にも似た（？）冒険の旅は、如何に？しかし、もしその途中でドン・キホーテが倒れて亡くなればトビーはどうするの？それにて、ドン・キホーテの夢の旅は終わり？それとも・・・？本作のパンフレットにある2つのコラム解説をしっかりと読みながら、あなた自身の夢（妄想？）を広く（たくましく？）展開させていただきたい。79歳のテリー・ギリアム監督にそれができたのだから、1月26日に71歳を迎えた私だって、そして私と同年配のあなただって、きっとそれは可能なはずだ。

2020（令和2）年1月31日記